

ホームページ形式による ラーニング・ポートフォリオ作成の試み

下野 辰久*

Creating a Web Based Learning Portfolio

Tatsuhisa Shimono*

キーワード

教育評価、ラーニング・ポートフォリオ、キャリア教育

はじめに

平成20年12月に出された中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において、成績評価に関して大学に期待される取組として、「学生が自らの学習成果の達成状況について整理・点検するとともに、これを大学が活用し、多面的に評価する仕組み（いわゆる学習ポートフォリオ）の導入と活用を検討する。」という表現で、ラーニング・ポートフォリオの積極的な活用が大学に要請されることとなった¹⁾。また、平成23年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」においても、キャリア教育を含めた大学教育の中でのラーニング・ポートフォリオの重要性が次のように示されている²⁾。

一人一人のキャリアは、その人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖によって形成される。これまで自分が何をしてきたのか、今何をしているのかを振り返り、それを未来につなげようとする視点は、キャリア教育において不可欠である。このように、キャリア教育において自らの学習活動の過程や成果を振り返ることは重要である。例えば、キャリア教育に関する学習活動の過程・成果に関する情報を集積した学習ポートフォリオを作成し、積極的に活用していくことなどにより、子ども・若者が自らの将来の仕事や生活について考える機会を作ることが必要である。

ユニバーサル化の大波を正面から浴びている大学においては、多様化する学生の一人ひとりに向き合うために、個々の学生の成長の状況をできるだけ把握しておくことが教職員にとっては必要となる。学生の学びの蓄積と振り返りを記録したポートフォリオは、学生自身にとっても、教職員にとっても重要なツールとなるのである。さらに、教育の有効性

* しもの たつひさ：大阪国際大学人間科学部教授（2011.12.9受理）

を判断する大学教育に対する評価においても、ラーニング・ポートフォリオは大きな役割を果たす。

ラーニング・ポートフォリオの有効性については、その限界と克服法も含めて、土持の著書に詳しく述べられている^{3, 4)}。すでにながりの大学では、大学内の情報システムと一体化したe-ポートフォリオの導入が行われている。e-ポートフォリオの未導入大学に対して、その効果を訴え、導入を勧めてくるソフトウェア会社も多い。大学教育へのラーニング・ポートフォリオの導入は、止められない流れであり、特に、全入を余儀なくされ、多様化の幅が広い学生を受け入れる大学においては、初年次教育・キャリア教育などを進めていくうえで、無くてはならないツールになっているとも言える。

著者が所属する大阪国際大学の場合には、先行している多くの大学のように、学生が利用できるコンピュータシステムの中に、学生自身がラーニング・ポートフォリオを作っていくための仕組みは備わっていない。MoodleやSNS等で、ポートフォリオを作ることも可能ではあるが、学生自身の持ち運びと活用を考慮すると、USBメモリの中にポートフォリオを作りあげることが現時点では最適と思える。また、学生一人ひとりの個性についても、ラーニング・ポートフォリオの中に表現することを考えると、ホームページの形式は魅力的である。インターネット上へのアップを前提としなければ、履歴書や成績、自己分析等の就職活動時に必要となる個人情報も盛り込むことが可能である。

著者はこれまで、初年次科目であるセミナーIにおいて、すべての資料(テーマの説明資料、ワークシート、簡単なクイズ、SPIの問題等)をB5サイズのルーズリーフに印刷して配布してきた。そして、あらかじめ提供したバインダーに学生自身が配布資料を挟んでいくことにより、セミナーIでの学びをそこに蓄積させてきた。その中には、毎回の授業終了時に、学生が感じたことや考えたこと(振り返り)を文章で表現したものに、著者が添削し、コメントを加えたものも含まれている。また、前期終了時と後期終了時には、それぞれ半年間、1年間の振り返りと今後の目標等についても考えさせる時間をとってきた。さらに、セミナーIの授業には、学生の自己理解など、キャリア形成に必要な内容も加えてきた。したがって、1年間のセミナーが終了した時点で、学生の手元には、自らのワークや振り返りも含めたセミナーでの学びの蓄積が残されている。ただ、これまでは、セミナーIでの学びに限定されていた。そこで、将来のラーニング・ポートフォリオ導入への前段階として、セミナーIの内容に加えて、他の授業の履修状況や提出物、クラブ活動等の正課外での活動を含めた、初年次における学びのすべてを、USBメモリにホームページ形式で統合することを試み、大阪国際大学に入学した1年次の学生が、ホームページ作成に関する特別な知識が無い状態からスタートして、ホームページ形式によるラーニング・ポートフォリオの作成を行うことが可能かどうかについて検討を行った。

方法

著者の平成20年度のセミナーIに配属された学生19名に対して、8GBのUSBメモリを5月に配布した。その際に学生生活におけるラーニング・ポートフォリオの意義を簡単に説明し、今後の学生生活で作成することになるレポートやプレゼンテーション資料など

について、可能な限り、このUSBメモリの中に保存しておくように指示した。また、セミナーにおいては、学生に提出させる課題には、できるだけワードやエクセルで作成したものを要求し、そのつどUSBメモリ内に保存させた。

大学祭が終了した11月から、コンピュータ演習室において、ホームページの作成を開始した。ホームページ作成ソフトであるホームページビルダー（大阪国際大学の場合はバージョン9）を用いて、著者がサンプルを作成する過程を、学生提示用のディスプレイに示すことにより、作成方法とポートフォリオに組み込む内容とを理解させながら、学生に自らのホームページ作成を促した。

ホームページの作成にあたっては作業をできるだけ簡単に進めるために、ホームページビルダーに関する最低限の操作と機能だけを説明し、次のような設定で作成を進めた。

編集スタイル 「かんたん」

ページの作成

ページの種類 「通常ページ」 作り方 「白紙から」

編集モード 「どこでも配置モード」

学生に対して今回、最低限のものとして理解させた操作は以下に示すものである。

「文字の挿入」 「ロゴ（飾り文字）の挿入」

「画像ファイルの挿入」 「壁紙の挿入」

「デジカメ写真の挿入」 「表の挿入」

「リンクの挿入」 「その他の挿入」

このようなホームページビルダーの操作方法について、1コマ（90分間）の授業を4回実施して、あとは個々の学生の質問に答える形をとり、コンピュータ演習室での各自の作業に任せた。スキャナーで読みとった画像や、デジタルカメラで撮影した静止画、動画も活用させるようにした。

その際、当然のことながら学生間で理解度が異なるため、同じプロセスを数回ゆっくりと繰り返して、できるだけ脱落者が出ないように配慮した。一方で学生には、完成したラーニング・ポートフォリオをセミナーⅠの評価に加えると指示し、より充実したホームページを作成することを促した。ゴールとして学生に示したホームページの概要を図1に示す。

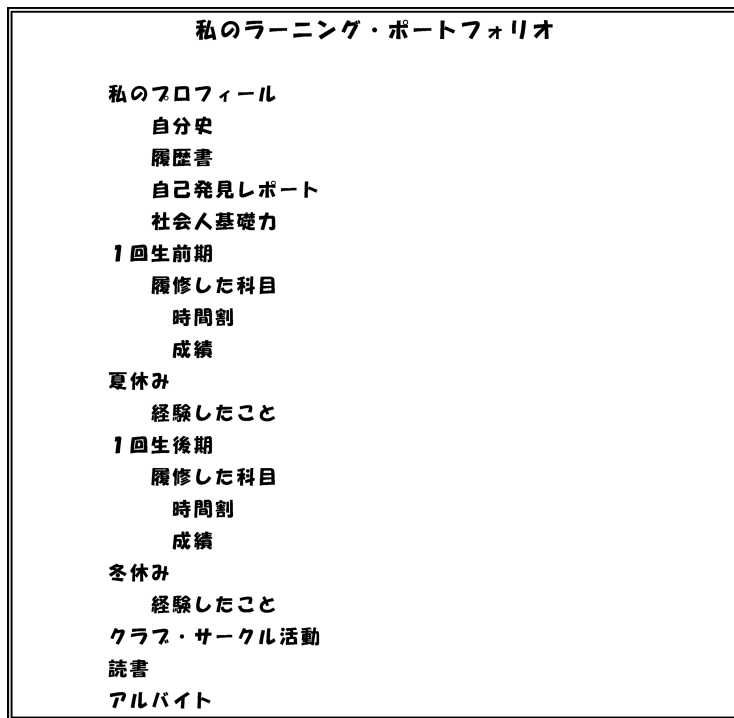


図1 ゴールとして学生に示したホームページのコンテンツ

トップページに示した図1の各項目から、詳細な内容を含むページにリンクさせた。以下にそれぞれのコンテンツの詳細を示す。

【自分史】

- ・誕生から大阪国際大学人間科学部人間健康科学科入学に至るまでの年表
- ・小学校入学前について自らが語る動画（デジタルカメラで撮影）
- ・小学校時代について自らが語る動画（デジタルカメラで撮影）
- ・中学校時代について自らが語る動画（デジタルカメラで撮影）
- ・高等学校時代について自らが語る動画（デジタルカメラで撮影）

【履歴書】

- ・大学所定の用紙に記入したもの（スキャナーで読み取り）

【自己発見レポート】

- ・全員に対して4月に実施した自己発見レポート（BENESSE）の個人別の結果（スキャナーで読み取り）

【社会人基礎力】

- ・社会人基礎力の12の能力要素について10段階で自己評価したもの（前期中ごろ、後期開始時、後期終了時の3回実施）

【1回生前期】

- ・ 時間割
- ・ 履修した各科目のシラバス
- ・ 提出したレポート
- ・ 作成した発表用資料
- ・ 成績

【夏休みの体験】

- ・ 研修、旅行など

【1回生後期】

- ・ 時間割
- ・ 履修した各科目のシラバス
- ・ 提出したレポート
- ・ 作成した発表用資料

【冬休みの体験】

- ・ 研修、旅行など

【クラブ・サークル活動】

- ・ 試合結果、合宿などの活動

【読書記録】

- ・ 読書リスト
- ・ 感想文
- ・ セミナーでの読書課題（7月、夏期休暇、10月）

【アルバイト】

- ・ 内容、経験したことなど

結果と考察

ほとんどの学生は、大学入学までにホームページを作成した経験を持っていなかったが、セミナーの時間以外での学習を含めて、すべての学生が最低レベルのラーニング・ポートフォリオをホームページの形で作成することができた（2名については最終の状態は未確認）。このことは、大阪国際大学の1年次の学生に対して、ホームページビルダーの基本的操作さえ理解させることができれば、学生が自らの力により学びの成果を蓄積していけることを示している。ただ、個々の学生によって、作成のための指導とパソコンを用いた作業を含む、ラーニング・ポートフォリオ作成に要する時間にはかなりの差が生じた。これには学生の基礎学力と生活習慣が大きく関わっていると考えられる。

今回はホームページビルダーの操作を、学生提示用のディスプレイに表示しながら、ひとつずつ順にプロセスを説明していく形をとったが、操作の説明を数回繰り返しても、すぐには操作を理解できない学生が存在した。一方で、ひとつの説明をするとすぐにそれを応用して、次々とページ内にコンテンツを構成していく学生もいた。集団の中で、聴いた内容を速やかに理解できる学生と、1対1でなければ理解が十分に進まない学生が、大阪

国際大学には混在していることをあらためて実感した。

さらに、セミナーⅠが1時限目に開講されていることもあり、遅刻や欠席が原因で、説明を十分聞くことができずに、ホームページの作成が遅れていく学生も数人見られた。一方で、講義の空き時間を利用して、コンテンツを充実させていく学生もいた。

順調に進まない学生に対しては、時間割で与えられている時間の終了後に、さらに時間をとって1対1で指導することや、試験期間中などに補習時間を設定して支援することで、全員が最低限のホームページは作成できたが、これは、すべての授業に共通する、ユニバーサル化した大学の宿命であると言える。ある程度の情報を与えれば、その後は自ら加速し飛び上がっていけるタイプ、1対1で横に付いて指導していけば、飛び上がるころまで持っていけるタイプ、生活習慣の適正化が何をにおいても優先するタイプなど、それぞれの学生に応じた指導が必要であることが明らかになった。

今回はホームページの作成を後期から開始したこともあり、半年間の学生生活の充実度が関係しているのか、作成に向けての学生の意欲にも最初から差が見られた。単位取得に関わるため、しかたなく作っている学生から、作成することに面白さを見出し、次々と内容の充実を図っていく学生まで、学生の意欲はさまざまな状況であった。次年度からは、学生のモチベーションが高い、前期の早い時期からスタートすることが必要と感じた（平成23年度は5月から始めている）。

作成中の学生の感想には、「なるほど、こんな風にホームページは作られているのか」といった、ホームページの仕組みに関する驚きや、自分史の小学校入学前の部分の作成で、「久しぶりに親とのコミュニケーションがとれてよかった」といった、コンテンツを充実する際に付随した体験に関するものなど、ラーニング・ポートフォリオの作成が、様々な形で学生への刺激となったことがうかがえるものがあった。

さらに作成後の感想としては、「充実したものができて良かった」、「できるとは思わなかったのにすごいものができた」、「自分らしいものが完成した」など、達成感につながるものが多くあがっていた。ホームページを作り上げるプロセスは大変な作業であるが、適切に指導することができれば、この経験は学生の自信の向上にもつながると言える。

ホームページビルダーの基本的操作を理解させることで、学生は自らの学びをUSBメモリ内にホームページ形式で蓄積していけることがわかったが、これは入学後のできるだけ早い時期に始めることが望ましいと言える。大阪国際大学の場合には、1年次に実質的には必修と言える「コンピュータ基礎演習」という科目が複数開設されている。したがって、これらの科目の中で、現在も行われている、学内におけるパソコンの使用法やワード、エクセルなどのソフトの使用法に加え、入学後の早い時期にホームページビルダーの基本的操作を学習させることができれば、全ての学生が、その後さまざまな授業で作成することになる学習成果や、キャリア教育において分析する自分自身の理解に関する情報をホームページ形式で蓄積していくことが可能になる。

さらに実際の運用に関しては、セミナー等で、できるだけ幅広く学生生活の成果をコンテンツとして盛り込むように指導する必要がある。また、学生が作成したホームページをもとにして、セミナー担当が定期的に面談を行い、その結果も蓄積することが望ましい。

さらに、現在、いくつかの学科で実施されている学生基礎力調査（BENESSE）のような、個々の学生に対するアセスメントの結果も組み込んでいけば、学生が自分自身の成長を振り返るための客観的データも取り入れることができる。

USBメモリ内への学びの蓄積は、当然2年次以上においても可能である。そして、この蓄積は、3年次後半から始まる就職活動をサポートしてくれる学生自身の宝物になるはずである。最終的段階として卒業論文を加えれば、4年間の学生時代の学びがその中には凝縮されることになる。著者はセミナーⅠの評価に、このラーニング・ポートフォリオも含めているが、各学年で開講されている必修科目のセミナーにおいても同様の対応をとることが、学生と教員間の良好なコミュニケーション形成に基づく学生の成長に寄与すると考えられる。将来的には、全学的な情報システムの中にキャリア・ポートフォリオを含むラーニング・ポートフォリオが組み込まれることが望ましいが、多額の投資を必要としないUSBメモリ内へのホームページ形式での蓄積は、それまでの有効な方法と考えられる。

おわりに

ホームページ作成に関してほとんど経験のない1年次の学生に対して、ホームページビルダーの操作について数時間の説明を行うことで、自らの学びを記録するラーニング・ポートフォリオを、学生自身がホームページ形式で作成できることが明らかになった。学生自身にとっても、リフレクションを行いながら自らの成長を確かめ、先に向けての計画や行動につなげるために、ラーニング・ポートフォリオは有効なツールである。一方で、教職員にとっても、学生を指導する上で、このポートフォリオは有効なツールとなるが、さらに、平成23年度以降の2期目の認証評価に向けて、教育の評価をどのような形で行うかが問われる大学にとっても、ティーチング・ポートフォリオの活用^{5) 6)}と併せて、ラーニング・ポートフォリオの導入は不可欠になると考えられる。この流れの中で、情報システムの中にポートフォリオの機能を持たない大学にとっては、容量が十分大きくなったUSBメモリの中に、ホームページ形式で、学生の個性も含んだラーニング・ポートフォリオを作成させることは有効な手段であると言える。

参考文献

- 1) 中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」、平成20年12月24日。
- 2) 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、平成23年1月31日。
- 3) 土持ゲリー法一『ラーニング・ポートフォリオ 学習改善の秘訣』、東信堂、平成21年。
- 4) 土持ゲリー法一『ポートフォリオが日本の大学を変える ティーチング/ラーニング/アカデミック・ポートフォリオの活用』、東信堂、平成23年。
- 5) 土持ゲリー法一『ティーチング・ポートフォリオ 授業改善の秘訣』、東信堂、平成19年。
- 6) 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会『[[実践] ティーチング・ポートフォリオ スターターブック ～実質的な教育改善活動を目指して～』、NTS、平成23年。

